

機関番号：32643

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20730559

研究課題名(和文) ポストコロニアルの視点にたった先住民学習の教材開発

研究課題名(英文) Development of teaching materials for Studies of Indigenous Populations from a Postcolonial Perspective

研究代表者

中山 京子 (NAKAYAMA KYOKO)

帝京大学・文学部・准教授

研究者番号：50411103

研究成果の概要(和文)：従来の先住民をテーマとした教育活動について、ポストコロニアルな視点から問題点を示し、先住民学習の意義を検討した。そして、先住民に関する展示をもつ博物館や先住民研究機関との連携のもとに、偏りのない理解を深めるための教材の開発を行った。その際、主にグアムの先住民チャモロをテーマにした試行実践を行った。研究を通して先住民学習の意義を明らかにし、これからの先住民学習の可能性を検討した。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this research was to discover current approaches to studies in education of indigenous populations from the “postcolonial” perspective and discussing the significances of leaning about indigenous people. This study resulted in the development of teaching materials concerning the indigenous people with the cooperation of museums and organizations, and using these materials to teach students in Japan. The primary focus was on the Chamorro people who are native people of Guam. Through this research, the significances of indigenous studies in elementary and secondary classrooms were definite. The possibilities for introducing these types of studies into curriculum in future were also discussed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：先住民民族 ポストコロニアル 文化人類学 教材開発 先住民学習 授業実践

## 1. 研究開始当初の背景

これまで日本の学校教育において、アメリカ先住民を事例にした教材開発、実践授業報告はあま

り行なわれてこなかった。教科書には多少の関連した記述があるとしても、それらは周辺的な取扱いであって、授業研究、教材研究の主たるテーマ

になることはなかった。近年では、英語に親しむ活動として「10人のインディアン」の歌を、アメリカ先住民団体が反対していることなどを理解しないままに学習活動に取り込んでいたり、環境教育において先住民を「自然とともに生きる人びと」というステレオタイプ化した捉えをもとに学ぼうとしたりする実態がある。こうした先住民に関する問題性を含む認識に無自覚な日本の教育に対して早急に改善を提言する必要がある。

アメリカ先住民に関する知識やイメージについて調査を実施したところ、日本の小学生から大学生までのほとんどが、現代社会に生きる先住民に関する知識をもたず、コロニアルなステレオタイプな認識があることが明らかになった。以前から日本の先住民研究者から、子どもたちの認識の問題点が指摘されていたにもかかわらず、教材研究や授業改善が行なわれてきていなかったことに原因がある。

グローバル時代の現代、ヒト、モノ、情報はトランスナショナルな移動をし、地球的相互理解を促進する一方で、そこから欠落した部分については、理解が深まらないばかりか偏った、誤った認識を継続、深化させてしまうこともある。これらを回避するためには、子どもたちのステレオタイプ化してしまっている異文化の捉え直しを試みる教材開発が必要である。その方策として先住民自身が展開してきたポストコロニアルな視点に学ぶことができると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、従来の先住民をテーマとした教育活動について、ポストコロニアルな視点からの検討を通してその問題点を示し、先住民学習の意義を明らかにする。

また、先住民に関する展示をもつ博物館や教育機関との連携のもとに偏りのない理解を深めるための教材を開発することを目的とした。

## 3. 研究の方法

上記の目的を達成する為に、1年目は主として文献収集と博物館などにおける先住民学習の実践調査、2年目は先住民学習構築にむけたポストコロニアル理論の整理、3年目は脅威材開発と実施、検討を行った。以下に具体的な研究方法を示す。

### (1) 1年目

- ①先住民展示を持つ博物館のポストコロニアルな視点による展示表象分析と、先住民に関する教育プログラム調査を実施。  
(国立民族学博物館アイヌ、オセアニアなどの先住民展示、アメリカン・インディアン博物館、ハワイ先住民文化回復プログラム、グアムチャモロ学習局及び学校)
- ②児童生徒の認識調査に関する文献の整理、子どもたちへのインタビュー調査を実施。
- ③先住民文化回復運動関係機関、グアム教育委員会と密に連絡をとり、研究内容を示しながら示唆を得た。

### (2) 2年目

- ①ポストコロニアル理論のレビュー、文献整理を行い、ポストコロニアルの視点にたった先住民学習への視点を抽出し、理論を構築した。理論の検証のために、事例研究を展開する場としてのグアムに着目する。
- ②ポストコロニアルな視点にたった教材開発を行い、試行実践として大学授業科目「国際理解教育論」で先住民学習を行った。
- ③中間報告としてグアムで行われている先住民学習を中心に、研究成果中間報告書として『グアム・チャモロの記憶』にまとめた。

### (3) 3年目

- ①2年次に行った試行実践の結果をもとに教材の修正を行い、大学における授業や神奈川県立高校においても協力を得て先住民学習の授業を行い、教材の妥当性を検証した。
- ②まとめとして、従来の先住民学習についてポストコロニアルの視点から検討した問題点を示し、実践をふまえて成果を学会大会や研究会において積極的に行った。
- ③最終的な学問上の精査のためにチカソウインディアンセンターなどを訪問、また、文化人類学者や歴史家との交流を通して、実践の妥当性について協議を重ねた。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の成果

まず、先進国において先住民主体に運営される博物館や組織では、先住民学習のためのプログラム開発や実践が積極的に行われ、かつそれらは文化を紹介するといったレベルではなく、コロニアルな視点に抵抗する視点を育てることをねらっていることが明らかになった。これらはポストコロニアルな視点になった先住民学習モデルと位置づけることができた。

次に複雑なポストコロニアル理論を教育の視点から整理するために、教育文化人類学の取り組みや課題を整理することができた。資料調査、博物館での観察などから、ポストコロニアルな視点にたった先住民学習の意義を、以下の三つに整理することができた。

- ① 植民支配側のもの見方で語られがちな物語について、先住民自身の見方からの物語にふれることで、先住民の歴史的経験と現在の様相を理解し、知識をもつことができる。
- ② 多文化社会において自らのエスニシティについて考え、ポストコロニアルな視点から自らのエスニシティを見つめ直すことができる。
- ③ ポストコロニアルは現在も進行形であり、そういった社会における自らのあり方（生き方）に関する意思決定をすることができる。これらの視点を生かして日本の児童生徒を対象とした教材開発を行うにあたり、マリアナ諸島に着目した。グアムやサイパンは大航海時代以降、植民地主義に翻弄され、現在は基地化と外国資本

による観光ビジネス支配という環境にあって、ポストコロニアルな運動を展開している。先住民学習が活発であり思考モデルが充実していること、なおかつ日本から年間140万人の観光客が訪れているにもかかわらず、学校教育の中でこれまでほとんど取り上げてこられなかったからである。

### (2) 成果の国内外における位置づけとインパクト

日本における先住民学習は、従来アイヌ先住民族に関するものがほとんどであり、文化学習が中心であった。本研究において行った研究対象、教材開発及び実践は、外国の先住民を取り上げ、またポストコロニアルの視点を鮮明にしたことが、これまでの研究と異なる点である。マリアナ諸島のグアムでは、ポストコロニアルな視点、教育の視点をもった研究者がフィールドワークに入ったことはなく、地元からはコロニアルな歴史、教育の取り組みを理解してもらえる機会と捉えていただき、惜しめない協力をいただいた。先住民の視点から描いたグアムに関する本の出版はこれまでになかったことから、『入門 グアム・チャモロの歴史と文化』に刊行は日本とマリアナの関係者にインパクトを与えた。

### (3) 今後の展望

調査活動と通じて、歴史的にも現在も日本と太平洋地域の関わりは強いにもかかわらず、日本において太平洋地域をテーマにした教材開発研究の少なさ、太平洋地域と日本の教育に関する連携研究がほとんど行われていないことが明らかになった。また、ポストコロニアルの視点から教育を考えるポストコロニアル教育学という領域も日本の教育において語られていない。

そこで、今後は、ポストコロニアル教育学、太平洋地域、先住民学習をキーワードにしながらさらに研究を緻密な物にしていきたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計4件)

- ① 中山京子、太平洋地域学習の意義と可能性—マリアナ諸島・グアムを事例にポストコロニアルの視点を育てる—、帝京大学文学部教育学科紀要、査読無、36号、2011、1-10
- ② 中山京子、先住民学習の理論と実践—ポストコロニアル人類学の活用—、総合研究大学院大学博士学位論文—論文内容の要旨及び審査結果の要旨、査読有、38集、2010、165-167
- ③ 中山京子、ヴァヌアツをめぐるポストコロニアル議論と教育—カスタムを尊重する実践の試み—、京都ノートルダム女子大学研究紀要、査読無、40号、2010、25-38
- ④ 中山京子、児童生徒の先住民認識の問題—ポストコロニアルの視点にたった先住民学習にむけて—、京都ノートルダム女子大学研究紀要、査読無、39号、2009、17-29

[学会発表] (計3件)

- ① 中山京子、太平洋地域学習の意義と可能性—マリアナ諸島・グアムを事例にポストコロニアルの視点を育てる—、日本社会科教育学会、2010年11月14日、筑波大学
- ② 中山京子、社会科教師としての自己形成—子どもへのまなざしと異文化へのまなざしを通して—、全国社会科教育学会、2009年11月23日、香川大学
- ③ 中山京子、日本人児童生徒がもつ先住民認識の問題—ポストコロニアルな視点から認識と学習活動を問う—、日本国際理解教育学会、2008年6月15日、富山大学

[図書] (計2件)

- ① 中山京子、明石書店、入門 グアム・チャモロの歴史と文化、2010、98頁
- ② 中山京子、海外機関との連携—パールハーバーワークショップの実践—、日本国際理解教育学会編著、明石書店、グローバル時代の国際理解教育—理論と実践をつなぐ—、2010、263頁(執筆箇所188-193頁)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

特記事項なし

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 京子 (NAKAYAMA KYOKO)  
帝京大学・文学部・准教授  
研究者番号：50411103

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

中牧 弘允 (NAKAMAKI HIROCHIKA)  
国立民族学博物館・教授  
研究者番号：90113430

森茂 岳雄 (MORISHIGE TAKEO)  
中央大学・文学部・教授  
研究者番号：30201817

(4) 研究協力者

織田 雪江 (ODA YUKIE)  
同志社中学・高等学校・教諭  
研究者番号：なし

居城 勝彦 (ISHIRO KATSUHIKO)  
東京学芸大学附属世田谷小学校・教諭  
研究者番号：なし

Alison Muller  
Roads Middle School・教諭  
研究者番号：なし

Ronald Laguana  
グアム教育委員会先住民学習課・課長  
研究者番号：なし

Lawrence Cunningham  
元グアム大学教授  
研究者番号：なし